

科目番号 35

分野	基礎分野 ・ 専門基礎分野 ・ 専門分野Ⅰ ・ 専門分野Ⅱ ・ 統合分野 ・ 臨地実習			
授業科目	基礎看護学目的論	科目責任者		
単位/時間数/授業回数	1 単位/30 時間/15 回			
授業の種類	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験 ・ 実技			
必修・選択	必修 ・ 選択	年次・開講時期	1 年次・前期	
履修条件	有 ・ 無 ()			
担当教員名		実務経験の有無・実務経験内容		
		有 ・ 無 (看護師)		
学習目的と到達目標				
〈学習目的〉 生命・人間を対象とする専門職としての看護者に求められていることは何かを知り、今、自分が何をすべきか、どのような姿勢で3年間の学習を継続すべきか自覚し、行動できる姿勢を養う。				
〈到達目標〉 1. 看護の本質を理解し、看護の役割と機能を理解できる。 2. 看護理論の概念・意義を理解できる。(H. E. ペプロウ、I. J. オーランド、E. ウィーデンバック、D. E. オレム、S. C. ロイ、J. トラベルビー) 3. 主な看護理論の理解をとおして活用の実際を理解できる。(F. ナイチンゲール、V. ヘンダーソン) 4. 看護理論の概要を理解できる。 5. 看護における倫理観を培うことができる。 6. 医療安全に必要な基礎的知識を理解できる。 7. 保健医療における国際協力のしくみを理解できる。				
授 業 計 画				
回数 (1 回 90 分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
1	看護学生心得	・ 講義ガイダンス ・ 看護学生として学ぶには ・ 理想の看護師像について	講義	
2	看護の本質 看護の変遷	・ 看護の原点、看護の語源 ・ 歴史の中の看護 (F. ナイチンゲール登場以前)	講義	
3	F. ナイチンゲールの功績	・ 『看護覚え書』を読み解く ・ 看護の変遷 (F. ナイチンゲールの以降のアメリカと日本の看護)	講義	
4	看護の定義	・ 法律からみた看護 (看護師) の定義 ・ 専門団体からみた看護 (看護師) の定義 ・ 看護理論家にみる看護の定義と活用 (V. ヘンダーソン)	講義	
5・6	看護理論	・ 看護理論の概念と意義 (H. E. ペプロウ、I. J. オーランド、E. ウィーデンバック、D. E. オレム、S. C. ロイ、J. トラベルビー)	講義	
7	看護の役割と機能	・ 看護の質保証に必要な要件 ・ 看護を取り巻く現状 ・ 看護の役割・機能の変化・拡大	講義	
8	看護の継続性と情報共有	・ 看護の継続性や情報共有がなぜ必要か ・ チームワークに必要な要素	講義	

回数 (1回 90分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
9	・看護職の資格と養成 ・看護の提供のしくみ	・看護職の養成制度 ・専門看護師、認定看護師、特定行為研修 ・看護サービス提供の場 ・看護サービスと経済の仕組み	講義	
10	看護倫理	・職業倫理としての看護倫理 ・倫理原則、看護者の倫理綱領 ・現代医療の倫理的問題	講義	
11	看護倫理	・療養上の世話等で生じる倫理的問題事例のグループワーク	GW	
12	看護倫理	・療養上の世話等で生じる倫理的問題事例のグループワーク（発表、意見交換）	GW	
13	医療安全	・日本における医療安全の歴史 ・ヒューマンエラーを起こす要因 ・医療事故防止対策（インシデントレポート、指差呼称、KYT）	講義	
14	保健医療・看護における国際協力	・国際的な健康課題 ・医療や看護の国際協力のしくみ ・日本に在留する外国人の看護	講義	
15	終講試験 筆記（60分）		試験	
授業内訳	講義：14回（28時間）（GW 4時間含む） 試験：1回（2時間）			
準備学習等				
〈復習について〉 ・講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。講義時間内で実施できない場合は、ホームワークとする。 ・第2～9回、第13、14回に関しては、講義後、テキスト「看護学概論」の該当ページを熟読し、復習をすること。（各回約1時間必要） ・『看護覚え書』『看護の基本となるもの』は夏季休暇前までに精読しておく。				
成績評価の方法	筆記試験（70%）、グループワーク及び発表（20%）、講義態度（10%）とし総合的に評価する。			
テキスト	・茂野香おる他：系統看護学講座、専門分野Ⅰ基礎看護学①看護学概論、医学書院、2019。 ・F. ナイチンゲール著、薄井坦子、小玉香津子訳：看護覚え書、現代社、2017。 ・V. ヘンダーソン著、湯楨ます、小玉香津子訳：看護の基本となるもの、日本看護協会出版会、2018。			
参考図書	手島恵監修：看護者の基本的責務、日本看護協会出版会、2020。			
備考	・当科目は、基礎看護学臨地実習Ⅰ-2の履修条件であるため、当科目の単位を取得できないと基礎看護学臨地実習に行くことができない ・授業の進捗状況により授業内容を変更する場合がある。			
国家試験出題基準	必修問題 目標Ⅰ-4-A-a～d, f 目標Ⅰ-4-B-a～e 目標Ⅰ-4-C-a～d 目標Ⅰ-5-A-a～d 目標Ⅱ-6-A-a, b 目標Ⅱ-9-A-a～j 目標Ⅱ-9-B-a～f	基礎看護学 目標Ⅰ-1-A-a～e 目標Ⅰ-1-B-a～g 目標Ⅰ-1-D-a～e 目標Ⅰ-2-B-a～c 目標Ⅰ-2-C-a～d 目標Ⅰ-3-D-a～c 目標Ⅰ-3-G-a 目標Ⅱ-6-A-a～c 目標Ⅱ-6-B-a～c		

科目番号 36

分野	基礎分野 ・ 専門基礎分野 ・ 専門分野Ⅰ ・ 専門分野Ⅱ ・ 統合分野 ・ 臨地実習			
授業科目	基礎看護学対象論	科目責任者		
単位/時間数/授業回数	1 単位/15 時間/7 回			
授業の種類	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験 ・ 実技			
必修・選択	必修 ・ 選択	年次・開講時期	1 年次・前期	
履修条件	有 ・ 無 ()			
担当教員名		実務経験の有無・実務経験内容		
		有 ・ 無 (看護師)		
学習目的と到達目標				
〈学習目的〉 看護の対象である人間についての理解を深め、健康の概念、各健康段階における看護を実践するための基礎的知識を習得する。				
〈到達目標〉 1. 看護の対象としての人間の特徴を理解できる。 2. 健康の概念及び各健康段階における看護の意義、特徴を理解できる。 3. 現代日本人の健康について理解できる。 4. ライフサイクルから捉えた対象の特徴と健康問題を理解できる。				
授 業 計 画				
回数 (1 回 90 分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
1・2	看護の対象	・ 人間理解に必要な学説、理論について (スキヤモンの発達曲線、ピアジェの知的発達段階、エリクソン、ハビガーストの発達課題、マズローの欲求段階説、セリエのストレス学説、ラザルスのコーピング理論、キューブラロス、フィンクの危機理論、デーケンの悲嘆のプロセス) ・ 看護の対象としての患者と家族	講義	
2	健康	・ 健康の概念 ・ 健康に関する指標、健康に影響する要因	講義	
3・4	現代日本人の健康	・ 健康に影響する要因 (生活行動/習慣、生活環境、社会環境) の視点から現代日本人の健康に関するグループワークを行い、成果を発表する。	GW	
5	各健康段階における看護 1	・ 健康維持/増進を目指す看護 ・ 急性期における看護 ・ 慢性期における看護	講義	
6	各健康段階における看護 2 看護からみた症状	・ リハビリテーション期における看護 ・ 終末期における看護 ・ 症状とは ・ 症状をめぐる看護の基本的な視点	講義	
7	終講試験 (筆記) 60 分		試験	
授業内訳	講義 : 7 回 (14 時間) (GW 4 時間含む) 試験 : 1 回 (1 時間)			

準 備 学 習 等

〈復習について〉

- ・第1回、2回の講義後に、テキスト『看護学概論』の第2章看護の対象の理解を精読し、講義内容を合わせ、復習をする。(各回約1時間必要)
- ・終講時に健康に関するレポートの提出を求める。(テーマについてはその時に提示する)
- ・現代日本人の健康に関するグループワークは、時間内に終了しない分を時間外やホームワークを活用し行う。

成績評価の方法	筆記試験（60%）、グループワーク及び発表（20%）、レポート（10%）講義態度（10%）とし総合的に評価する。	
テキスト	・茂野香おる他：系統看護学講座、専門分野Ⅰ基礎看護学①看護学概論、医学書院、2019. ・香春知永他：系統看護学講座、専門分野Ⅰ基礎看護学④臨床看護総論、医学書院、2019.	
参考図書	特になし	
備 考	・当科目は、基礎看護学臨地実習Ⅰ-2の履修条件であるため、当科目の単位を取得できないと基礎看護学臨地実習に行くことができない。 ・授業の進捗状況により授業内容を変更する場合がある。	
国家試験出題基準	必修問題 目標Ⅰ-1-A-a, b 目標Ⅰ-1-B-a～i 目標Ⅰ-1-C-a～e 目標Ⅰ-2-A-a, d, f～i 目標Ⅰ-2-B-a～c 目標Ⅰ-2-C-a～c 目標Ⅱ-6-A-a, b 目標Ⅱ-6-B-a～d 目標Ⅱ-8-A-a～c 目標Ⅱ-8-B-a, b 目標Ⅲ-10-A-a	基礎看護学 目標Ⅰ-1-B-a～g 目標Ⅰ-1-C-a～e

科目番号 37-1

分野	基礎分野 ・ 専門基礎分野 ・ 専門分野Ⅰ ・ 専門分野Ⅱ ・ 統合分野 ・ 臨地実習			
授業科目	基礎看護学方法論Ⅰ－①	科目責任者		
単位/時間数/授業回数	2 単位 60 時間の内の 30 時間/15 回			
授業の種類	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験 ・ 実技			
必修・選択	必修 ・ 選択	年次・開講時期	1 年次前期～後期	
履修条件	有 ・ 無 （ ）			
担当教員名		実務経験の有無・実務経験内容		
		有 ・ 無 （ 看護師 ）		
		有 ・ 無 （感染管理認定看護師 ）		
		有 ・ 無 （ 看護師 ）		
		有 ・ 無 （ 看護師 ）		
学習目的と到達目標				
〈学習目的〉 あらゆる健康レベルにある対象の日常生活援助に対応できる基礎看護援助能力を養う。				
〈到達目標〉 ●看護技術概論 1．技術の一般概念を踏まえ、看護技術の特殊性(独自性も含む)を理解する。 2．看護技術を習得する過程を知り、看護技術を習得する上での自己の学習のあり方について考える事ができる。 ●コミュニケーション 1．看護におけるコミュニケーションの重要性を理解し、対象とより良い人間関係を築くための自己表現の基礎知識・技術・態度を知る。 ●バイタルサイン 1．バイタルサインに付随するフィジカルアセスメントの重要性、及びバイタルサイン測定の意義・目的が理解できる。				
授 業 計 画				
回数 (1 回 90 分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
1	看護技術概論	看護技術とは 看護技術の特徴 看護技術の基本原則	講義	
2	看護技術概論	看護技術の構成 看護技術として求められる範囲	講義	
3	看護技術概論	医療者としての感染予防の基礎知識	講義	
4	看護技術概論	感染予防演習	演習	
5	コミュニケーション	コミュニケーションの意義と目的 ・概念、意味、意義、相互作用、特徴 医療におけるコミュニケーション ・目的、特徴、重要性 コミュニケーションの構成要素と成立過程 ・手段、要素、過程、ミスコミュニケーション	講義	
6	コミュニケーション	関係構築のためのコミュニケーションの基本 ・接近的行動、非接近的行動	講義	

回数 (1回90分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
7	コミュニケーション	効果的なコミュニケーションの技術 ・傾聴、質問、説明、承認、提案 ・アサーティブネス コミュニケーション障害のある人への対応	講義	
8	バイタルサイン	・バイタルサインの意義、概念、バイタルサインの影響因子と測定の意義、看護にとってのフィジカルアセスメントの意義と目的	講義	
9	バイタルサイン	・体温の生理と変動因子、体温測定の方法と観察事項 ①腋窩検温法②口腔検温法③直腸検温法 ・呼吸の生理と変動因子、呼吸測定の方法と観察事項（視診による測定）	講義	
10	バイタルサイン	・脈拍の生理と変動因子、脈拍測定の方法と観察事項（触診による測定）	講義	
11	バイタルサイン	・血圧の生理と変動因子、血圧測定方法と観察事項 ①血圧測定に証する器具の点検②触診法③聴診法 ・意識	講義	
12	バイタルサイン	・バイタルサイン測定の実際 (1)体温、脈拍、呼吸、体温の測定方法	演習	
13	バイタルサイン	・バイタルサイン測定の実際 (1)体温、脈拍、呼吸、体温の測定方法	演習	
14	バイタルサイン	・バイタルサイン測定の実際 (1)体温、脈拍、呼吸、体温の測定方法 (2)測定値の記録・報告	演習	
15	バイタルサイン	・バイタルサイン測定の実際 (1)体温、脈拍、呼吸、体温の測定方法 (2)測定値の記録・報告	演習	
その他	終講試験 筆記（60分）		試験	
授業内訳	講義：11回（22時間） 〔技術概論：4回（8時間） コミュニケーション：3回（6時間） バイタルサイン：4回（8時間）〕 演習：4回（8時間） 試験：その他1回（1時間）			
準備学習等				
〈予習に関して〉 ●看護技術概論：必要時、講師より授業時間内に伝達有 ●コミュニケーション：テキストの該当ページを読み講義に臨む。 ●バイタルサイン ・第1～3回はテキスト「基礎看護技術」の該当ページを精読し講義に臨むと理解しやすい。（各回約30分必要）第12～15回の演習は、演習は事前課題を提示する。（各回約1時間必要）また、夏季休暇時に、血圧測定を実施する課題がある。 ・バイタルサイン実施時、報告に関しては、既習学習と関連させ予習する必要がある。（約30分必要） 〈復習について〉 ●看護技術概論：講義資料を読み返す。 ●コミュニケーション ・講義資料やテキストを読み返す。 ●バイタルサイン ・講義資料を用い、授業内容を理解するとより理解が深まる。（各回約1時間必要） ・「振り返りワーク」の内容を復習する（各約30分必要） ・実習室にて、バイタルサインの練習を実施することで、技術習得につながるため積極的に練習する必要がある。				

成績評価の方法	評価配分：看護技術概論 30%（うち感染管理 15%）、コミュニケーション 20%、バイタルサイン 50%とし合計 100%とする。 評価方法： 1. 看護技術概論・コミュニケーション筆記試験のみ。 2. バイタルサインは、筆記試験 80%、事前学習（体温・脈拍・呼吸・血圧測定の手順書・夏季課題 10%、演習態度を 10%とする。	
テキスト	・有田清子他：系統看護学講座、専門分野Ⅰ基礎看護学③基礎看護技術Ⅱ、医学書院、2019. ・任 和子他編：根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術第2版、医学書院、2019.	
参考図書		
備考	●技術概論 ・講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。 ●コミュニケーション ・講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。 ●バイタルサイン ・講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。	
国家試験出題基準	●技術概論 - 基礎看護学 - 目標Ⅳ-15-C-a, b - 目標Ⅱ-3-F-a～c ●コミュニケーション - 必修問題 - 目標Ⅳ-13-A-a～c - 基礎看護学 - 目標Ⅱ-3-A-a～c	●バイタルサイン - 必修問題 - 目標Ⅳ-13-C-a, b - 基礎看護学 - 目標Ⅱ-3-E-d

科目番号 37-2

分野	基礎分野 ・ 専門基礎分野 ・ 専門分野Ⅰ ・ 専門分野Ⅱ ・ 統合分野 ・ 臨地実習			
授業科目	基礎看護学方法論Ⅰ－②	科目責任者		
単位/時間数/授業回数	2 単位 60 時間の内の 30 時間/15 回			
授業の種類	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験 ・ 実技			
必修・選択	必修 ・ 選択	年次・開講時期	1 年次 ・ 前期	
履修条件	有 ・ 無 ()			
担当教員名		実務経験の有無・実務経験内容		
		有 ・ 無 (看護師)		
		有 ・ 無 (看護師)		
学習目的と到達目標				
〈学習目的〉 看護における看護技術の位置づけを理解し、看護に必要な共通基本技術能力を養う。				
〈到達目標〉 ●ボディメカニクス ・ 1. ボディメカニクスの定義・目的・構成する要素、良いボディメカニクスについてについて理解できる。 2. ボディメカニクスの原則と留意事項を理解できる。 3. ボディメカニクスを日常生活・看護技術に活用ができる。 ●観察・記録・報告 1. 看護における観察・記録・報告の目的・重要性を理解し、対象が必要としている看護（援助）を判断するための意図的・系統的な観察ができる。 2. 記録の原則と注意すべき事柄をふまえ、必要事項を正確・簡潔明瞭に記録することができる。 ●感染予防 1. 安全管理の必要性を理解し、対象の安全を守るために必要な知識・技術を身につける。 2. 感染防御に必要な基本的技術が実践できる。 ●電法・吸入・吸引 1. 電法の意義、目的、温熱寒冷刺激に対する生体反応を理解し、効果的な温・冷電法の判断実施ができる。 2. 吸入・吸引の目的原理原則をふまえ、蒸気、薬液、酸素吸入、一時吸引、持続吸引の方法が理解できる。 ●教育・指導技術 1. 看護における教育的役割について理解することができる 2. 健康教育の目的について理解することができる 3. 個別指導、集団指導の方法について理解することができる 4. 健康教育・指導の過程を理解し、指導計画を立案することができる				
授 業 計 画				
回数 (1 回 90 分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
1	ボディメカニクス	1) ボディメカニクスの定義、目的 2) ボディメカニクスを構成する要素(基本体位と特殊体位の課題) 3) 効果的な動作をするための法則	講義	
2	ボディメカニクス	1) 看護行為におけるボディメカニクスの原則と留意事項および活用 2) 基本的体位・体位変換の実際（仰臥位～側臥位）	講義 演習	

回数 (1回 90分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
3	観察・記録・報告	1) 看護における観察の意義、 目的・重要性・方法 2) 観察と看護行為との関係性 3) 観察の内容と視点	講義	
4	観察・記録・報告	1) 看護における記録の目的と条件 2) 看護記録の種類とその方式(SOAP) 3) 看護における観察と記録の関係性 4) 観察から記録の実際 5) 看護記録の法的重要性・法的責任 6) 看護記録の保管・管理上の注意事項	講義	
5	観察・記録・報告	1) 看護における報告の目的・重要性 2) 観察から報告の実際	講義	
6	観察・記録・報告	事例に基づき GW 後、報告の演習	講義 演習	
7	看護における安全 の概念及び意義 安全・感染予防 感染防御の技術	1) 感染の成立と予防・安全を阻害する因子、対象 を取り巻く環境の危険因子 2) 安全管理の必要性・対象の安全を守るために必 要な知識・技術 3) 感染の発生要因、その予防方法	講義	
8	感染防御に必要な 基本的技術 無菌 操作 滅菌と消毒	1) 感染防御に必要な基本的技術の実践 2) 滅菌手袋とガウンテクニック 3) 無菌操作での消毒	演習	
9	健康教育指導の 技術	1) 健康教育とは 2) 健康教育・指導の効果をあげる条件 3) 健康教育・指導の基本的な進め方 4) 健康教育・指導の形態	講義	
10	健康相談とカウ ンセリング技術	1) 健康相談とは 2) 健康相談の対象と特性 3) 健康相談におけるカウンセリング 4) 健康相談の進め方	講義	
11	指導技術の実際	1) 行動変容ステージに合わせた対応 2) 「患者指導計画書」の取り組み	講義	
12	体温の調節 電法	1) 体温調整のアセスメント 2) 体温調節のための方法 3) 電法の種類と適応 温電法 冷電法	講義 演習	
13	呼吸管理 酸素療法の原則 口腔・鼻腔内吸引	1) 呼吸調整のアセスメント 2) 酸素吸入の適応と方法 3) 口腔鼻腔吸引の適応と方法	講義	
14	酸素吸入 去痰法の適応と方 法	1) 中央配管と酸素ボンベから酸素吸入の実際 2) ネブライザー吸入の実際 (デモンストレーション)	演習	
15	一時吸引 去痰法の適応と方 法	1) 口腔内吸引の実際 2) 中央配管とポータブル吸引	演習	
その他	終講試験 筆記 60 分		試験	

授業内訳	講義：12 回（24 時間） [ボディメカニクス 2 回（4 時間） 観察・記録・報告 4 回（8 時間） 感染予防 1 回（2 時間） 電法・吸入・吸引 2 回（4 時間） 指導・教育 3 回（6 時間）] 演習：3 回（6 時間） [感染予防 1 回（2 時間） 電法・吸入・吸引 2 回（4 時間）] 試験：その他 1 回（1 時間）
準備学習等	
〈予習について〉 ●ボディメカニクス ・第 1.2 回は、テキスト「基礎看護技術」の該当ページと、「基礎・臨床看護技術」を精読し講義に臨むと理解しやすい。（各回 1 時間必要） ・基本体位と特殊体位の事前学習をおこない提出する。（1 時間程度要する） ●観察・記録・報告	
準備学習等	
・1～4 回は、テキスト「基礎看護技術」の該当ページと、「基礎・臨床看護技術」を精読し講義に臨むと理解しやすい。（各回 1 時間必要） ●教育・指導技術 ・テキスト「基礎看護技術Ⅰ」の該当ページを精読し講義に臨むと理解しやすい。 ・テキストの事例を元に指導計画書を作成するため、事例の対象をイメージしておくとう理解しやすい。 ●感染・電法・吸入・吸引 ・テキスト「基礎看護技術」の該当ページと「基礎・臨床看護技術」を精読し講義に臨むと理解しやすい。（各回 1 時間必要） 〈復習について〉 ●ボディメカニクス ・講義資料の内容を理解するとより理解が深まる。 ・基本体位は、実習室にて実際に姿勢を実施することで、より理解が深まる。（約 1 時間程度） ●観察・記録・報告 ・講義資料の内容を理解するとより理解が深まる。 ・今後の看護技術演習時に、報告を自主練習することで、技術が習得でき理解が深まる。 ●教育・指導技術 ・講義資料の内容を理解するとより理解が深まる。 ・作成した指導計画書を提出した後、再度自己で振り返り指導計画書を作成することで理解が深まる。 ●感染・電法・吸入・吸引 ・講義資料を用いながら『実践！看護技術シリーズ』「Vol.2 消毒・滅菌と無菌操作」を視聴し、内容を理解するとより理解が深まる。（各回約 1 時間程度必要）	
成績評価の方法	評価配分：ボディメカニクス 15%、観察・記録・報告 20%、感染 15%、電法・吸入・吸引 30%、教育・指導 20%の合計 100% 評価方法： 1. ボディメカニクス：筆記試験 2. 観察・記録・報告：筆記試験 3. 感染：筆記試験 10%、演習提出物 5% 4. 電法・吸入・吸引：筆記試験 20%、演習提出物 10% 5. 教育・指導：筆記試験
テキスト	・有田清子他：系統看護学講座、専門分野Ⅰ基礎看護学②基礎看護技術Ⅰ、医学書院、2019。 ・有田清子他：系統看護学講座、専門分野Ⅰ基礎看護学③基礎看護技術Ⅱ、医学書院、2019。 ・任 和子他編：根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術第 2 版、医学書院、2019。

参考図書			
備考	●ボディメカニクス ・講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。		
備考	●観察・報告・記録 ・講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。 ●感染・罨法・吸入・吸引 ・講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。		
国家試験出題基準	●ボディメカニクス 必修問題 目標Ⅳ-14-D-d 基礎看護学 目標Ⅱ-3-H-b	●感染・罨法・吸入・吸引 必修問題 目標Ⅳ-15-C-c, d 目標Ⅳ-16-E-a～c 目標Ⅳ-16-F-a～g 目標Ⅱ-3-F-c, e 目標Ⅱ-5-A-a～g	●観察・報告・記録 基礎看護学 目標Ⅱ-3-D-a～c ●教育・指導技術 目標Ⅱ-3-B-a～d

科目番号 38-1

分野	基礎分野 ・ 専門基礎分野 ・ 専門分野Ⅰ ・ 専門分野Ⅱ ・ 統合分野 ・ 臨地実習			
授業科目	基礎看護学方法論Ⅱ－①	科目責任者		
単位/時間数/授業回数	3 単位 90 時間の内の 30 時間/15 回			
授業の種類	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験 ・ 実技			
必修・選択	必修 ・ 選択	年次・開講時期	1 年次・前期	
履修条件	有 ・ 無 ()			
担当教員名		実務経験の有無・実務経験内容		
		有 ・ 無 (看護師)		
		有 ・ 無 (看護師)		
学習目的と到達目標				
〈学習目的〉 あらゆる健康レベルにある対象の日常生活援助に対応できる基礎看護援助能力を養う。				
〈到達目標〉 1. 看護における環境調整の必要性和意義を理解し、病床環境を整える基本的技術が修得できる。 2. 活動と休息の意義及びそれらが身体に及ぼす影響について理解する。 3. ボディメカニクスを活用した体位変換及び移動・移送の技術が習得できる。 4. 対象の状況に応じた援助方法が選択でき、安全・安楽を考えた技術が習得できる。 5. 睡眠障害の原因や誘因、睡眠障害の徴候を知り、安眠への援助について理解する。				
授 業 計 画				
回数 (1 回 90 分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
1	環境	人間にとっての環境の意義	講義	
2	生活環境	病院における生活環境とその整備	講義	
3	ベッドメイキング	ベッドメイキングの方法	講義	
4	病床環境	病床環境を整える (GW) (演習)	演習	
5	ベッドメイキング	ベッドメイキングの実際 (演習)	演習	
6	ベッドメイキング	臥床患者のシーツ交換・生活環境のまとめ	演習	
7	ベッドメイキング	シーツ交換の実際 (演習)	演習	
8	ベッドメイキング	シーツ交換の実際 (演習)	演習	
9	活動・休息・安楽の概念	・ 人間の生活リズム サーカディアンリズム ・ 運動活動機能のアセスメント ・ 睡眠の型とリズム ・ 睡眠中の生体変化・睡眠障害・安眠への援助	講義	
10	安楽な体位と体位保持 安静とその弊害	・ 安楽と安静 ・ 安楽の概念 ・ 安静の弊害 ・ 褥瘡 ・ 褥瘡の発生因子 ・ 褥瘡予防	講義	
11	姿勢・移動の概念	・ 姿勢・体位の特徴 ・ 基本体位・特殊体位 ・ 安楽な体位と体位保持・体位変換 ・ 体位が身体に及ぼす影響 ・ 活動・移動の援助の基本	講義	

回数 (1回 90分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
12	安楽な姿勢の保持と体位変換	・体位変換の目的、方法 ・体位変換の援助の留意点	講義	
13	移動の援助方法	・安楽な体位保持の方法 ・ベッド上での移動の方法 ・体位変換 ・安楽な体位保持	講義	
14	移動と移送	・移動の種類と方法	演習	
15	移動と移送の実際	・ベッドから車椅子への移動 ・ストレッチャーへの移動	演習	
その他	終講試験 筆記 (60分)		試験	
授業内訳	講義：9回 (18時間) 〔生活環境 3回 (6時間) 活動・休息 6回 (12時間)] 演習：6回 (12時間) 〔生活環境 4回 (8時間) 活動・休息 2回 (4時間)] 試験：その他 1回 (1時間)			
準備学習等				
〈予習〉 ●生活環境 ・第1～3回は、テキスト「看護技術」の該当ページを精読し講義に望むと理解しやすい。(各回 30 分必要) ・第4～8回の演習は、テキストと講義資料を基に、実習室で練習する。 ●活動と休息 ・第7～10回は、テキスト「看護技術」の該当ページを精読し講義に望むと理解しやすい。(各回 30 分必要) ・第14～15回の演習は事前学習課題を提示する。(各回 1 時間必要)				
〈復習〉 ●生活環境 講義資料を用い、図書室にある『実践！看護技術シリーズ』日常生活の援助技術編 Vo1.1『ベッドメイキング』・Vo1.2『リネン・寝衣の交換』を視聴し、内容を理解するとより理解が深まる。(約 1 時間程度必要) ・振り返りシートの内容を復習する (各約 30 分程度必要) ●活動と休息 講義資料を用い、図書室にある『実践！看護技術シリーズ』診療に関する技術編 Vo1.3『体位変換』を視聴し、内容を理解するとより理解が深まる。(約 1 時間程度必要) ・振り返りシートの内容を復習する (各約 30 分程度必要)				
成績評価の方法	・評価配分 生活環境 50%、活動と休息 50% ・評価方法 ①生活環境 筆記試験 40% 提出物 10% ②活動と休息 筆記試験 30% 演習・提出物 20%			
テキスト	・有田清子他：系統看護学講座、専門分野Ⅰ基礎看護学③基礎看護技術Ⅱ、医学書院、2019. ・任 和子他編：根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術第2版、医学書院、2019.			
参考図書				
備考	・講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。			
国家試験出題基準	●生活環境 必修問題 目標Ⅳ-15-A-a～c 基礎看護学 目標Ⅱ-4-A-a～C		●活動と休息 必修問題 目標Ⅳ-14-C-a～f 基礎看護学 目標Ⅱ-4-D-a～d 目標Ⅱ-4-E-a～d	

科目番号 38-2

分野	基礎分野 ・ 専門基礎分野 ・ 専門分野Ⅰ ・ 専門分野Ⅱ ・ 統合分野 ・ 臨地実習			
授業科目	基礎看護学方法論Ⅱ-②	科目責任者		
単位/時間数/授業回数	3 単位 90 時間の内の 30 時間/15 回			
授業の種類	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験 ・ 実技			
必修・選択	必修 ・ 選択	年次・開講時期	1 年次 ・ 後期	
履修条件	有 ・ 無 （ ）			
担当教員名		実務経験の有無・実務経験内容		
		有 ・ 無 （摂食嚥下障害看護認定看護師）		
		有 ・ 無 （ 看護師 ）		
		有 ・ 無 （ 看護師 ）		
学習目的と到達目標				
〈学習目的〉 あらゆる健康レベルにある対象の日常生活援助に対応できる基礎的援助技術能力を養う。				
〈到達目標〉 ●食 1. 人間にとっての食の意味について生理的意義・社会的意義・心理的意義から理解できる。 2. 食事摂取におけるアセスメントができ、適切な食への援助技術の選択及び食事介助技術を習得できる。 ●排泄 3. 人間にとっての排泄の意味について生理的意義・社会的意義・心理的意義から理解できる。 4. 排泄に関するアセスメントができ、対象の状態に適した援助方法の選択とその技術を習得できる。				
授 業 計 画				
回数 (1 回 90 分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
〔食〕				
1	食の意義 食事援助の基本	・ 食時の意義 ・ 食事の援助	講義	
2	食事介助	・ 摂食嚥下の実際 ・ 経管・経腸栄養法、経静脈栄養法（中心静脈栄養法） ・ 座位による基本的な食事介助 ・ 経鼻経管栄養法の管理	演習	
3	口腔ケアの意義・援助	・ 口腔内清潔の意義・目的 ・ 口腔内清潔の重要性 ・ 口腔ケアの援助法	講義	
4・5	口腔ケア	・ 歯ブラシと、スポンジブラシを用いた口腔ケア ・ 義歯洗浄	演習	
〔排泄〕				
6	排泄の生理・意義	・ 健康な生活における排泄の意義（身体的・精神的・社会的） ・ 排泄（排尿・排便）のメカニズム ・ 健康な生活における排泄（排尿・排便）状態 ・ 排泄（排尿・排便）の障害	講義	
7	排泄に関する情報収集、アセスメント	・ 排泄（排尿・排便）のアセスメントに必要な情報 ・ 排泄のアセスメントの視点	講義	

回数 (1回 90分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
8	自然な排泄を促す援助	・ 自然な排泄を促す援助 ・ 排泄行動に障害のある対象への排泄援助 (床上排泄、ポータブルトイレ、おむつ)	講義	
9	排泄障害（排便）のある患者の援助	・ 排泄（排便・排尿）障害のある対象への援助 ・ 浣腸、摘便を受ける患者の看護 ・ 浣腸、摘便の実施方法と留意点	講義	
10	排泄障害（排尿）のある患者の援助	・ 排泄（排便・排尿）障害のある対象への援助 ・ 導尿（一時的導尿法）、膀胱留置カテーテル法を受ける患者の看護 ・ 導尿（一時的導尿法）、膀胱留置カテーテル管理の実施方法と留意点	講義	
11	尿器・便器を用いた排泄介助	・ 臥床状態にある患者に対する便器・尿器を用いた症状排泄の援助	演習	
12	オムツを使用した排泄介助	・ テープ型紙おむつを使用した患者へのおむつ交換の援助	演習	
13	浣腸（実験演習）	・ グリセリン浣腸液の温度上昇や放置時の温度低下の実験を通し、浣腸の準備や実施時の注意点を知る。	演習	
14	グリセリン浣腸	・ グリセリン浣腸を用いた援助	演習	
15	導尿法	・ 一時的導尿法を用いた援助 ・ 膀胱内留置カテーテル法について	演習	
その他	終講試験（筆記）60分		試験	
授業内訳	講義：8回（16時間） 演習：7回（14時間） 試験：その他1回（1時間）			
準備学習等				
〈予習について〉 ●食 第1～4回は、テキスト「基礎看護技術」の該当ページと、「基礎・臨床看護技術」を精読し講義に臨むと理解しやすい。（各回1時間必要） ●排泄 ・ 第6～10回は、テキスト「基礎看護技術」の該当ページを精読し講義に臨むと理解しやすい。（各回約30分必要） ・ 第11, 12, 14, 15回の演習は事前課題を提示する。（各回約1時間必要）第15回は、基礎看護方法論Ⅰ-②「感染」の滅菌操作法の既習学習と関連させ予習する必要がある。 〈復習について〉 ●食 ・ 講義資料と、「基礎看護技術」の巻末の動画や、図書室にある『実践！看護技術シリーズ』日常生活の援助技術編 Vol.4『食事の援助』Vol.5『経管栄養法』、清潔の援助技術編 Vol.5『口腔ケア』を視聴し、内容を理解するとより理解が深まる。（各回約1時間必要） ・ 「振り返りワーク」の内容を復習する。（各約30分必要） ●排泄 ・ 講義資料を用い、図書室にある『実践！看護技術シリーズ』排泄援助技術編 Vol.11『排尿・排便の援助』Vol.12『オムツを用いた排泄援助』Vol.13『導尿・膀胱留置カテーテル』Vol.14『浣腸・摘便』を視聴し、内容を理解するとより理解が深まる。（各回約1時間必要） ・ 「振り返りワーク」の内容を復習する（各約30分必要）				
成績評価の方法	評価配分：食 30％、排泄 70％ 評価方法：食：筆記試験（30％） 排泄：筆記試験（50％）、演習レポート等（20％）			

テキスト	・有田清子他：系統看護学講座、専門分野Ⅰ基礎看護学③基礎看護技術Ⅱ、医学書院、2019. ・任 和子他編：根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術第2版、医学書院、2019.	
参考図書		
備考	●食 ・講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。 ●排泄 ・講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。	
国家試験出題基準	●食 必修問題 目標Ⅳ-14-A-a, b 目標Ⅳ-14-D-c 目標Ⅳ-16-A-a, b 基礎看護学 目標Ⅱ-4-B-a～i	●排泄 必修問題 目標Ⅳ-14-B-a～e 基礎看護学 目標Ⅱ-4-C-a～f

科目番号 38-3

分野	基礎分野 ・ 専門基礎分野 ・ 専門分野Ⅰ ・ 専門分野Ⅱ ・ 統合分野 ・ 臨地実習			
授業科目	基礎看護学方法論Ⅱ-③	科目責任者		
単位/時間数/授業回数	3 単位 90 時間の内の 30 時間/15 回			
授業の種類	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験 ・ 実技			
必修・選択	必修 ・ 選択	年次・開講時期	1 年次 ・ 前期～後期	
履修条件	有 ・ 無 （ ）			
担当教員名		実務経験の有無・実務経験内容		
		有 ・ 無 （ 看護師 ）		
		有 ・ 無 （ 看護師 ）		
学習目的と到達目標				
〈学習目的〉 あらゆる健康レベルにある対象の日常生活援助に対応できる基礎的援助技術能力を養う。 〈到達目標〉 1. 人間にとっての衣と清潔の意義及び援助の必要性について理解できる。 2. 対象の清潔に対するニーズを満たすための必要な基本的援助技術が習得できる。 3. 身体の生理機能を理解し、清潔に関わる援助の必要性を身体的・精神的・社会的側面から捉えることができる 4. 情報を解釈（アセスメント）し、対象にとっての援助の必要性を理解したうえで、必要な清潔援助の内容・方法の選択ができる 5. 対象の清潔に対するニーズを満たすために必要な基本的援助技術が習得できる 6. 清潔援助に伴う対象の心理的側面への配慮の大切さに気付き、実践に反映していくことができる 7. 自己の技術を含めた援助過程を評価することで、対象にとってよりよい援助方法となるよう対象の安全・安楽・自立の視点に立った振り返りができ、今後の援助に活かしていくことができる 8. 日常生活における衣と清潔の援助について、自己の経験を踏まえながら興味・関心を持って主体的に自己の学習・課題に取り組みことができる				
授 業 計 画				
回数 (1 回 90 分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
1	清潔の意義	1) 清潔の意義 2) 清潔の援助の必要性 3) 身体の清潔に関する基礎知識 4) 身体の清潔を保つための援助の方法(入浴・シャワー浴・全身清拭・手浴・足浴)	講義	
2	身体の清潔を保つための援助の方法	1) 清拭の方法 (1) 全身清拭とは(2) 清拭の援助に必要な知識(3) 外皮系フィジカルアセスメント 2) 陰部の清潔方法	講義	
3	衣生活	1) 衣生活の意義 2) ライフステージにおける衣生活の特徴 3) 健康障害に応じた衣生活 4) 病衣の条件・衣の清潔について 5) 衣生活に関するアセスメント 6) 衣生活の援助 7) 寝衣交換の方法	講義	
4	寝衣交換の方法	1) 和式寝衣の交換法 2) 和式寝衣たたみ方	演習	

回数 (1回 90分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
5	頭髮・頭部の 特徴	1) 頭髮・頭部の皮膚の特徴 2) 汚れの原因 3) 洗髪の意味	講義	
6	洗髪の手助	1) 洗髪に関するアセスメント 2) 洗髪の方法 3) 洗髪の手助方法	講義	
7・8	洗髪の実際	洗髪の手具体的な方法（ケリーパット及び洗髪台）	演習	
9	全身清拭の 実際	・全身清拭の方法（演習）	演習	
10	全身清拭の 実際	・全身清拭の方法（演習）	演習	
11	全身清拭の 実際	・全身清拭の方法（演習）	演習	
12・13	全身清拭の 実際	1) 全身清拭の方法 2) 全身清拭実施後の報告(演 習)	演習	
14	全身清拭の 実際	・足浴の方法（演習）	演習	
15	全身清拭の 実際	・陰部の清潔方法（演習）	演習	
その他	技術試験 60分	全身清拭・寝衣交換	試験	
その他	終講試験 (筆記) 60分		試験	
授業内訳	講義：5回（10時間） 演習：10回（20時間） 試験：その他1回筆記試験（1時間） その他1回実技試験（60分）			
準 備 学 習 等				
〈予習について〉 ●身体の清潔と衣生活 第1～4回は、テキスト「基礎看護技術」の該当ページと、「基礎・臨床看護技術」を精読し講義に臨むと 理解しやすい。(各階1時間必要) ・講義資料と手順書で講義を振り返り、テキスト「基礎看護技術Ⅱ」の巻末の動画と「基礎・臨床看護技 術」の動画を視聴し演習に臨む。 ●洗髪 ・テキスト「基礎看護技術②」の該当ページと「基礎・臨床看護技術」を精読し講義に臨むと理解しやす い。 〈復習について〉 ●身体の清潔と衣生活 ・講義資料と手順書で講義を振り返り、テキスト「基礎看護技術Ⅱ」の巻末の動画と「基礎・臨床看護技 術」の動画を視聴し演習に臨む。また、図書室にある『実践！看護技術シリーズ』①日常生活の手助技術 編 Vol.12『寝衣の交換』、②清潔の手助技術編 Vol.1『入浴』、Vol.2『全身清拭、陰部洗浄』、Vol.3『洗 髪』、Vol.4『部分浴(足浴・手浴)』を視聴し、内容を理解するとより理解が深まる。(各回約1時間必要) ・「振り返りワーク」の内容を復習する。(各約30分必要) ・演習後は、講義資料と手順書を用い、実習室にて実技練習を積極的に実施する。 ●洗髪 ・講義資料と手順書で講義を振り返り、テキスト「基礎看護技術Ⅱ」と「基礎・臨床看護技術」の動画を 視聴し演習に臨む。				

成績評価の方法	評価配分：身体の清潔と衣生活：筆記試験 60%、洗髪 40% 評価方法：身体の清潔と衣生活：筆記試験（40%）、演習レポート等（10%） 技術試験（10%） 洗髪：筆記試験（40%）	
テキスト	・有田清子他：系統看護学講座、専門分野Ⅰ基礎看護学③基礎看護技術Ⅱ、医学書院、2019. ・任 和子他編：根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術第2版、医学書院、2019.	
参考図書		
備考	●身体の清潔と衣生活 ・講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。 ●洗髪 ・講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。	
国家試験出題基準	●身体の清潔と衣生活 必修問題 目標Ⅰ-2-A-e 目標Ⅳ-14-D-a～h 基礎看護学 目標Ⅱ-4-F-a～d	●洗髪 必修問題 目標Ⅰ-2-A-e 目標Ⅳ-14-D-d 基礎看護学 目標Ⅱ-4-F-a～d

科目番号 39

分野	基礎分野 ・ 専門基礎分野 ・ 専門分野Ⅰ ・ 専門分野Ⅱ ・ 統合分野 ・ 臨地実習			
授業科目	基礎看護学方法論Ⅲ	科目責任者		
単位/時間数/授業回数	1 単位/30 時間/15 回			
授業の種類	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験 ・ 実技			
必修・選択	必修 ・ 選択	年次・開講時期	2 年次・前期	
履修条件	有 ・ 無 （ ）			
担当教員名		実務経験の有無・実務経験内容		
		有 ・ 無 （ 看護師 ）		
		有 ・ 無 （ 看護師 ）		
学習目的と到達目標				
〈学習目的〉 対象の治療・処置に必要な診療の基本的な援助技術を習得する。				
〈到達目標〉 1. 対象にとっての診察・検査の意義・目的について理解できる。 2. 診察時の介助・対象への援助の方法を理解し、その技術が習得できる。 3. フィジカルアセスメント（身体計測）の方法と技術が習得できる。 4. 主な検査の目的を理解し、検査技術の一つである「静脈血採血」の技術を習得できる。 5. 与薬の基礎知識が理解できる。 6. 薬物療法における看護師の役割について理解できる。 7. 薬物の効果を発揮させるための援助の必要性和その援助が理解できる。 8. 誤薬防止について理解できる。 8. 経口与薬・口腔内与薬法及び、経皮的与薬・直腸内与薬法が理解できる。 9・各注射法（皮内・皮下・筋肉・静脈注射）、その作用機序の相違点について理解できる。 10. 静脈内注射・筋肉内注射における援助の基本的技術について理解できる。 11. 輸血法に関して理解できる。 12. 輸液ポンプ・シリンジポンプの技術を習得できる。				
授 業 計 画				
回数 (1 回 90 分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
1	診察の意義と目的 フィジカルアセスメントの意義と方法	・ 診察における看護の役割 ・ フィジカルアセスメントの構成 ・ フィジカルアセスメントの基礎技術	講義	
2	フィジカルアセスメントの方法	・ 意識レベルの評価 ・ 肺の問診および視診・触診・打診・聴診（呼吸音・心拍） ・ 腹部の問診および視診・聴診・打診・聴診（腸蠕動音）	演習	
3	皮膚・創傷の管理 創傷のアセスメント	・ 創傷の治癒過程 ・ 創傷保護の種類 ・ 包帯法の種類とその実際	講義 演習	
4	検査の意義と目的 検査時の看護の役割	・ 検査を受ける対象の心理 ・ 検体検査 ・ 生体機能のモニタリング ・ 生体検査 ・ 血液検査の目的と種類 ・ 採血の種類 ・ 採血検査部位 ・ 採血方法	講義	

回数 (1回 90分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
5	「静脈血採血」の技術を習得する	・検体検査（静脈血採血）の方法 ・駆血帯の巻き方、静脈の選択、消毒の仕方	講義 演習	
6	「静脈血採血」の技術を習得する	・静脈採血の実際 採血静注シミュレーターを使用して実施	演習	
7	・与薬の基礎知識と看護師の役割、薬物・輸液療法 ・誤薬防止	・与薬の基礎知識が理解できる。・薬物療法における看護師の役割。（薬物取り扱い上の法的責任）・薬物の効果を発揮させるための援助の必要性和その援助。 ・誤薬防止の基礎知識と実際	講義	
8	薬物の与薬法と薬物療法が及ぼす影響	・経口与薬・口腔内与薬・吸入・点眼・点鼻法及び、経皮的与薬・直腸内与薬法。	講義	
9	注射の基礎知識	・注射の基礎知識、注射器具の取り扱い方法・各注射法（皮内・皮下・筋肉・静脈注射）、その作用機序の相違点・注射法の実際。	講義	
10	・輸血法の基礎知識 ・輸液ポンプ、シリンジポンプの原理と実際	・輸血法の理解。 ・輸液ポンプ・シリンジポンプの取り扱い。	講義	
11	直腸内与薬法の実際	・直腸内与薬法の技術の習得 ・モデルを使用しての実施。	演習	
12	「筋肉内注射」の技術を習得する	・筋肉内注射の実際 ・筋肉内注射シミュレーターを使用して実施。	演習	
13	「筋肉内注射」の技術を習得する	・筋肉内注射の実際 ・筋肉内注射シミュレーターを使用して実施。	演習	
14	「点滴静脈注射」「輸液・シリンジポンプ」の技術を習得する	・点滴静脈内注射シミュレーターを使用して実施 ・輸液、シリンジポンプの取り扱いの実際	演習	
15	「点滴静脈注射」「輸液・シリンジポンプ」の技術を習得する	・点滴静脈内注射シミュレーターを使用して実施 ・輸液、シリンジポンプの取り扱いの実際	演習	
その他	終講試験（筆記）60分		試験	
授業内訳	講義：7回（14時間） 演習：8回（16時間） 試験：その他1回（1時間）			
準備学習等				
〈予習について〉 ●診療・検査に伴う看護 ・第1～6回は、テキスト「看護技術」の該当ページを精読し講義に臨むと理解しやすい。（各回30分必要） ・2・4・6回の演習は事前学習課題を提示する。（各回1時間必要） ●薬物療法に伴う看護 ・第7～10回は、テキスト「看護技術」の該当ページを精読し講義に臨むと理解しやすい。（各回30分必要） ・第11～15回の演習は事前学習課題を提示する。（各回1時間必要） 〈復習について〉 ●診療・検査に伴う看護 ・第1回から6回については、講義資料を用い、図書室にある『実践！看護技術シリーズ』診療に関する技術編Vo1.1『検査時の看護Ⅰ』、Vo1.2『検査時の看護Ⅱ』、『フィジカルアセスメント』Vo1.1『フィジカルアセスメントの実際』、Vo1.3『呼吸・心血管・乳房』、Vo1.4『腹部・筋・神経』を視聴し、内容を理解するとより理解が深まる。（各回約1時間程度必要） ・振り返りシートの内容を復習する（各約30分程度必要）				

準 備 学 習 等		
●薬物療法に伴う看護 ・第7～15回については、講義資料を用い、図書室にある『実践！看護技術シリーズ』診療に関する技術編Vo1.3『与薬』、Vo1.4『注射』、Vo1.5『輸液』、Vo1.7『輸血』を視聴し、内容を理解するとより理解が深まる。(各回約1時間程度必要)		
成績評価の方法	・評価配分 診療・検査に伴う看護 35%、薬物療法に伴う看護 65% ・評価方法 1. 診療・検査に伴う看護 筆記試験 25% 演習・提出物 10% 2. 薬物療法に伴う看護 筆記試験 55% 演習・提出物 10%	
テキスト	・有田清子他：系統看護学講座、専門分野Ⅰ基礎看護学③基礎看護技術Ⅱ、医学書院、2019. ・任 和子他編：根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術第2版、医学書院、2019. ・香春知永他：系統看護学講座、専門分野Ⅰ基礎看護学④臨床看護総論、医学書院、2019.	
参考図書		
備 考	・講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。	
国家試験出題基準	●診療・検査に伴う看護 必修問題 目標Ⅳ-13-C-b～d 目標Ⅳ-16-D-a, b 目標Ⅳ-16-H-a, b 基礎看護学 目標Ⅱ-3-E-a～e 目標Ⅱ-5-B-a～c	●薬物療法に伴う看護 必修問題 目標Ⅳ-16-B-a, b 目標Ⅳ-16-C-a～d 目標Ⅳ-15-B-b～d 基礎看護学 目標Ⅱ-3-G-b 目標Ⅱ-5-C-a～c 目標Ⅱ-5-D-a～c

科目番号 40

分野	基礎分野 ・ 専門基礎分野 ・ 専門分野Ⅰ ・ 専門分野Ⅱ ・ 統合分野 ・ 臨地実習			
授業科目	基礎看護学方法論Ⅳ	科目責任者		
単位/時間数/授業回数	1 単位/ 30 時間/ 15 回			
授業の種類	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験 ・ 実技			
必修・選択	必修 ・ 選択	年次・開講時期	2 年次 ・ 前期	
履修条件	有 ・ 無 ()			
担当教員名		実務経験の有無・実務経験内容		
		有 ・ 無 (看護師)		
学習目的と到達目標				
〈学習目的〉 対象の健康障害に対する生活上の問題を判断し、解決するための基礎的能力を養う。 理論的知識を用いて、科学的根拠に基づいた問題解決的な思考を専門技術として活用する方法を習得する 〈到達目標〉 1. 看護過程の概念、及び、必要性を理解する。 2. 看護過程と看護理論の関係性について理解する。 3. V. ヘンダーソンの看護理論をふまえ、各基本的欲求の充足した状態の概念理解をし、アセスメントツールの活用を通して、看護の視点を持った意図的・系統的な情報収集・情報整理について理解する。 4. 看護理論に基づいた視点で、情報を収集・整理・アセスメントする重要性とその方法について理解する。 5. 全体論的な視点で捉えた対象像(情報関連図による)をふまえ、看護上の問題点を抽出する必要性と、その方法について理解する。 6. 看護計画を立案する必要性と、その方法について理解する。 7. 看護過程における実施の意味、位置づけを理解する。 8. 評価・修正の必要性をその方法について理解する。 9. 看護過程の各プロセスと、その相互作用について理解する				
授 業 計 画				
回数 (1 回 90 分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
1	看護過程とは	看護過程とは 問題解決思考 看護過程の各プロセス	講義	
2	看護過程展開の 各段階1	情報収集とは	講義	
3	看護過程展開の 各段階2	全体像をもちいての情報整理	講義	
4	看護過程展開の 各段階3	アセスメントとは	講義	
5	看護過程展開の 各段階4	充足状態の判断、結論について	講義	
6	看護過程展開の 各段階5	関連図の描き方	講義	
7	看護過程展開の 各段階6	全体像 アセスメント 関連図の見直し	講義	
8	看護過程展開の 各段階7	看護問題の抽出	講義	

回数 (1回 90分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
9	看護過程展開の各段階8	看護計画の立案	講義	
10	グループワーク	個人ワークで問題抽出したものを参考にグループで看護計画を立案する	演習	
11	グループワーク		演習	
12	グループワーク		演習	
13	グループワーク	グループワーク発表	演習	
14	まとめ	まとめ	講義	
15	終講試験 筆記（60分）		試験	
授業内訳	講義：10回（20時間）　演習：4回（8時間）　試験：1回（2時間）			
準 備 学 習 等				
〈予習について〉 人体のメカニズム　薬理学等の復習およびV・ヘンダーソンの「看護の基本となるもの」を熟読して講義に臨む。				
成績評価の方法	・評価方法：筆記試験、レポート提出物、GWの参加状況から評価する。 ・評価配分：筆記試験50%　演習（看護過程）課題50%			
テキスト	〈テキスト・参考文献〉 ・系統看護学講座専門1 基礎看護学〔1〕看護学概論，医学書院 ・V.ヘンダーソン著湯楨ます訳：看護の基本となるもの，日本看護協会出版会 ・看護過程を使ったヘンダーソン看護論の実践第2版，ヌーベル廣川 ・系統看護学講座専門1 看護学概論基礎看護学①医学書院			
参考図書				
備 考	授業時間以外に個人ワークを進める。 授業時間以外にもGWをすることもある。			
国家試験出題基準	必修問題 目標Ⅳ-13-B-a～e		基礎看護学目標Ⅰ-2-B-b 基礎看護学目標Ⅱ-3-C-a～e	

科目番号 41

分野	基礎分野 ・ 専門基礎分野 ・ 専門分野Ⅰ ・ 専門分野Ⅱ ・ 統合分野 ・ 臨地実習				
授業科目	看護研究		科目責任者		
単位/時間数/授業回数	1 単位/ 30 時間/ 15 回				
授業の種類	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験 ・ 実技				
必修・選択	必修 ・ 選択		年次・開講時期	3 年次 ・ 前後期	
履修条件	有 ・ 無 （ ）				
担当教員名			実務経験の有無・実務経験内容		
			有 ・ 無 （ 看護師・助産師 ）		
学習目的と到達目標					
〈学習目的〉 臨地実習において展開した看護を、事例研究としてまとめる過程を通じて、自己の看護観を深めるとともに、研究的態度を身につける。					
〈到達目標〉 1. 自己の学習過程の振り返りの中から、抱いた看護への興味、疑問を看護研究のテーマとして発展させ、研究活動を意図的にかつ計画的に進めることができる。 2. 患者に展開した看護のプロセスを科学的に分析することにより、理論的に研究を進めることができる。 3. 積極的に文献や人的資源を活用して、研究を進めることができる。 4. 論文としてまとめた自己の看護を、他者に伝わりやすいように工夫して発表することができる。 5. 発表会において、互いの研究に興味を持ち、相互に学びを深めることができる。 6. 自己の看護を客観視し、論文としてまとめ発表する過程を通して、自己の看護に対する考えを深めることができる。 7. 看護研究の全過程を通して、看護研究の必要性を理解し、看護を追求する者としての真摯な態度を身につけることができる。					
授 業 計 画					
回数 (1 回 90 分)	学習課題	学習内容		授業方法	担当
1	看護研究とは	1) 看護研究とは 2) 看護研究の歴史と意義 3) 研究の概観 4) 概念枠組みとは 5) EBN ：根拠に基づく看護		講義	
2	研究計画	1) 研究デザインはなぜ必要か 2) 研究デザインの種類 3) 質的研究と量的研究 4) 実験研究と準備－実験研究 5) 調査方法の種類		講義	
3	文献検討	1) 文献検索 2) 文献を批判的に読む 3) 実際に文献を読む		講義	
4	研究における倫理	1) 倫理とは 2) 研究で陥りやすい倫理問題 3) 対象の権利を守る		講義	
5	データ収集と文責	1) データ収集方法 母集団とは、標本とは		講義	

回数 (1回 90分)	学習課題	学習内容	授業方法	担当
5	データ収集と文責	2) 結果の分析方法 量的研究の分析方法 質的研究の分析方法	講義	
6	研究結果の活用	1) 研究論文の構成方法 2) リサーチクリティーク方法 論文の分析的評価の方法	講義	
7	事例研究	1) 事例研究の意義 2) 事例研究の方法 3) 自分の興味のあるテーマを上げてみる。	講義	
8	研究の実際 1	研究計画書の作成	演習	
9	研究の実際 2	事例研究論文作成	演習	
10	研究の実際 3	事例研究論文作成	演習	
11	研究の実際 4	事例研究論文作成	演習	
12・13	研究の実際 5	研究発表 (1日：4時間算定)	演習	
14・15	研究の実際 6	研究発表 (1日：4時間算定)	演習	
授業内訳	講義：7回(14時間) 演習（研究の実際：論文作成・発表）：8回（16時間）			
準 備 学 習 等				
〈予習〉 ・自分の興味のあるテーマについて文献を1つ読んでみる。 ・研究したいテーマについて、簡単にまとめる。				
〈復習〉 ・研究発表時の質疑より、再考察する。				
成績評価の方法	評価方法：研究計画書レポート（ 30 %）， 論文作成（ 50 %）・発表（ 20 %）（評価表による）			
テキスト	南 裕子編著 看護における研究 日本看護協会出版会			
参考図書				
備 考	講義終了時、講義内容に関連した国家試験既出問題等を「振り返りワーク」として実施する。			
国家試験出題基準	必修問題 目標Ⅰ－4－C－a， b		基礎看護学 目標Ⅰ－1－D－a～d 目標Ⅰ－2－B－a～C	